

協働事業評価書

事業名「お家ごはん塾」

事業主体：NPO法人ぼけっとステーション

担当課：健康保険医療課

評価者：協働推進懇話会（委員7名）

評価：◎他のモデルとなりうる ○適当である △工夫が必要

評価項目	評価【◎○△】	評価内容	評価【◎○△】	コメント
①事業の評価	◎ 3人 ○ 2人 △ 1人	事業スケジュール	◎ 0人 ○ 4人 △ 3人	<p>■参加者の欠席が発生してしまったのは残念である。やはり当初スケジュール通りできればよかった。事業は一定の成果が出せたと考えられる。</p> <p>■クローズドな対象者選定を行う必要があったため、難しさはあったと理解するが、スタートが大幅に遅くなった点は、他の協働事業を行う際の反省材料にしてほしい。単年度で行う事業ではあるが、前年度の協議段階でも、予備的に検討できることはあるはずである。</p> <p>■対象者の選定期間、調整が当初の計画とずれたことで、事業スタートが冬となったことは体調不良で欠席される方がいるという予測もついていたであろうし、実際に休まれていた方がいたのは残念である。ただ、回を重ねるごとに、参加者の方からの発言や料理への関心度から事業の成果はあったと思う。数か月経った時に参加者の方に料理を週に何回しているのかという調査は必要かと考える。その調査で料理をする回数が減っていたとしても、この事業が参加者にとっての「生活を変える気づき」になっていたのは確かだと思う。また、その調査で新しい「気づき」「ふりかえり」の機会になってもらえるといいと思う。</p> <p>■対象者に対し必要不可欠な事業内容であると感じました。相談支援、洞察の意味合いもある点が良かったと思う。</p> <p>■生活困窮者世帯だけでなく、多くの市民が関心を持つ内容であることから、当初から参加者を選定するのではなく、広く募集を行った上で、ターゲットである生活困窮者世帯にも参加を促せば良かったと思う。参加者の人数が少なくなったが、講師謝礼等の人件費は参加者数にかかわらず必要となる経費であり、結果として費用対効果が低くなってしまった。</p> <p>■対象者が参加しやすい夏休み期間中に実施する等、実施時期をもう少し検討すると良いと思う。</p>
		事業成果	◎ 2人 ○ 4人 △ 1人	
②協働の評価	◎ 2人 ○ 4人 △ 0人	プロセスの積み重ね	◎ 0人 ○ 7人 △ 0人	<p>■こうした難しいテーマについて、市民団体と行政が連携し、行政内部での連携も行えたことが大変すばらしい。協働でなければできなかった事業であり、協働で行ったからこそ、デリケートな問題を抱える市民の方々を対象とした市民団体の事業を実施できたということの重要性をしっかりと認識する必要がある。</p> <p>■栄養士としての専門性を持つ団体と、市民の個人情報扱う市が協働する協働事業提案制度ならではの事業であったと言える。少人数とはいえ貴重な学習と体験ができたことは、参加者にとって大きかったと言える。一方で、この事業で得られた知見を、今後どのように活かすのかが明確に伝わってこなかった。団体単独で継続することはできない事業であるため、担当課として実施結果を総括した上で、今後の展開について検討が必要と考える。</p> <p>■事業を実施する場所が、普段から支援・相談ができる場だったということもあり、事業が終わってからも利用できることが周知できたと思う。事業を実施した団体と、参加者の方が顔見知りになったことで、事業以外でも関わりを持ったり、「まちかど健康相談室」を利用するきっかけになってほしい。市の働きかけが準備段階だけに留まらず、実習中も参加者からの相談に応じたり、生活についてのアドバイスに応じる報告も聞くことができたのは、協働の成果とも言える。</p> <p>■対象者選定等、行政内での連携に難しさがあったように見えた。潜在的な対象者も多いと感じるので、ぜひ行政・事業者それぞれの良さを活かして連携し、事業継続により、個々人の生活力向上及び健康増進につなげてほしい。</p> <p>■支援を必要とする市民の生活改善につながる素晴らしい事業だと思う。今後、対象を広げることで隠れた要支援者等にも学ぶ機会が提供できる等、事業の広がりを期待できるものだと思う。</p>
		事業の広がり	◎ 4人 ○ 2人 △ 1人	
		市民満足度の向上	◎ 2人 ○ 5人 △ 0人	
		協働基本原則	◎ 1人 ○ 6人 △ 0人	
		協働の成果	◎ 3人 ○ 4人 △ 0人	

<p>③総合評価 上記①、②以外のコメント (団体や市へのアドバイスを含めて)</p>	<p>■こうした様々な問題を抱えている家庭に対するアプローチは、本来行政が主体的に解決を図っていくべき課題であるが、その実施プロセスにおいては、NPOをはじめとする市民団体の持つ専門性を十分活かしていく必要がある。今回参加された市民の方々をこの後ほったらかしにすることなく、積極的にアウトリーチを行い、より良い方向に進む手助けをする必要性を十分認識しなければならない。「食」はこうした問題を抱えている家庭において重要なテーマである。一過性の協働事業で終わらせることはあってはならない。</p> <p>■事業実施にあたり、和光アスナル学習支援教室や和光市ネウボラ課など、他の団体や課が関わった点は重要である。子どもや子育て世帯への応援は、多様な団体や行政機関の連携・協働が必要なため、一事業の観点だけでなく、支援のネットワークを構築する観点も合わせもって進めてほしい。</p> <p>■食事を提供するだけのサービスと違い、料理を教えて食事をみんなで共にするという働きかけはとても良い事業だと思う。「生きる力」をつけることは「自信にも繋がる」と思う。貧困等により、デリケートな生活環境の問題を抱える子どもは、生活体験も乏しいと考える。調理をしない家庭では、包丁さえ見たことがない子どももいるかと思うと、このような事業こそ広がってほしいと感じる。学校、親以外の大人との交流、知り合うきっかけ、市民同士の情報共有の場としても必要だし、とても有効な事業だと思う。今回の事業で問題だったのは、参加者の選定に時間がかかったということである。行政側の担当課が決まっている中で、他課と連携することは難しいと思うが、部署同士の連携を取り合い風通しをよくしてほしいと感じた。</p> <p>■生活困窮により子どもたちが満足に食事がとれない、独居の老人が十分な栄養のある食事を作らない、作れないなどが、社会問題化している。家庭の食事を改善する一環として、「お家ごはん」に焦点をあてたタイトルとして関心を持って臨んだ。今回だけでなく今後も継続して推進されることを望む。</p> <p>■子どもだけでなく大人も対象に行ったことに大きな意味があると思う。また、共働き、核家族化等の社会情勢の変化の中で、該当者は今回の対象者に留まらないと感じる。報告書に「少ない回数やスタッフ人数の実施でフォローアップが不十分」という様な考察があったが、幅広い市民の満足度向上等のために事業継続されることを期待している。</p>
---	--